

## 基調講演「脳を育てる動物飼育」

唐木英明



## 1 困った親たち

生活に困っているわけでもないのに給食費や保育料を払わない。最近はそんな社会的常識がない親が増えているようだ。小学校の教員が子供を叱ると、叱った理由は聞かずに、「うちの大事な子供を叱るな」と文句を言う。授業参観に来るよう依頼したところ、「勤務を休んでいくのだから日当を出せ」という要求を受ける。「大事な子供に掃除なんかさせるな」、「記念写真を撮るときは自分の子供を真ん中にしろ」など、とんでもない要求が続く。これを拒否すると、「担任を変える」と校長や教育委員会にねじ込む。そんな話は、枚挙に暇がない。

親なら誰でも自分の子供は特別に可愛いし、自分の子供はとくに大事に扱って欲しいと思う。しかし、他の子供のことも考えて、社会的常識の範囲内で行動するのが当たり前であり、自分の子供だけ特別扱いを要求するのは親のわがままに過ぎないことは、普通の人間なら誰でも分かっている。ところが、ほんの一部とはいえ、そのような社会的常識がない親が社会を騒がせている。そんな親に育てられた子供たちがどのような大人に育つか、考えると恐ろしい。

## 2 本能と理性

誰でもが持つ本能の脳は「自分が生き残るためにの脳」であり、そのために「自分だけよければいい」という利己的な行動をさせる。自分の命を守るために、あるいは欲しいものを手に入れるために、ときには暴力を振るう。そして男性ホルモンは暴力傾向を強くする。

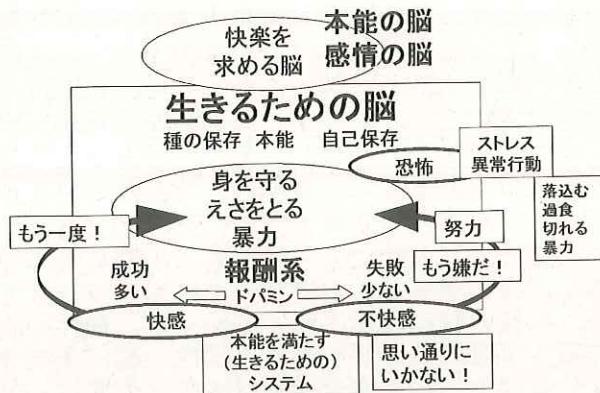


図1 本能の脳の働き

最も重要な本能は自分のみを守ることである。そのためにしてすべての動物は恐怖という感情を持つ。恐ろしいものに出会ったら直ちに逃げることでじぶんのいのちをすくうのである。また、競争心や闘争心や向上心を持つのも本能の脳があるからである。

この脳がないと生きてゆけないので、生まれたときにはすでにこの脳は働いている。生まれたての子供が大声で泣くことで空腹や苦痛を訴えるのは、この脳の働きである。

本能の脳を動かすのは「うまくいった」という満足感や快感である。動物はこの快感を得るために行動をする。思い通りに行かずには快感が得られないときにはストレスを感じて努力する。こうして動物は本能を満足させ、生き延びることができる。

しかし、いくら努力をしてもうまく行かないときにはストレスが大きくなり、ときには落ち込んだり、切れたり、暴力的になるなどの異常行動が起こる。人間の場合には最も簡単にストレスを解消する手段が過食である。

人間はもう一つの脳を持っている。それが理性の脳であり、社会の中で生きていくための脳である。他人の痛みを感じて、自分の欲望を抑えなければ社会は成立しない。そして、それを行うのが理性の脳であり、思いやり、やさしさ、道徳や倫理の脳である。理性の脳は、生まれたときには白いノートで、何も書かれていない。

長い時間をかけて経験を積み、教育を受けて、このノートに思い出と教訓が書き込まれ、適切な判断力すなわち社会的常識を養っていく。生まれたての子供は本能でしか行動しないが、成長するにつれて他人の心が分かるようになり、本能すなわちわがままを抑えられるようになる。

人間は2つの脳を持っているが、本能の脳さえあれば生きて行ける。実際に、爬虫類や両生類な

どの脳の大部分は本能の脳であり、これらの動物は恐怖と快樂だけで動かされる本能的な行動しかできない。だから本能の脳はトカゲの脳とも呼ばれる。理性の脳は、必要な場面で本能の脳を抑制する判断をする働きをし、欲求不満のストレスを生む脳でもある。人間の行動を観察すると、その判断や行動の大部分が情緒的あるいは前例に従った経験的ものであり、わずかな部分が論理的・理性的なものである。しかし、わずかであっても理性的な部分があることが人間の人間たる所以といえる。だから理性の脳は人間の脳と呼ばれる。

このように、人間にあってどちらの脳も大事であるが、最も重要なことは二つの脳のバランスである。本能の脳は勝手に育つが、理性の脳は意識して育てる必要がある。理性の脳が未発達で、必要なときに本能を抑制できない人間は、反社会的な行動に走ってしまう。他方、理性の脳が強すぎて本能を抑えすぎると、ストレスが溜まって、うつになったり突然切れたりする。二つの脳のバランスのとりかたを学ぶことが生きる力を養うことである。

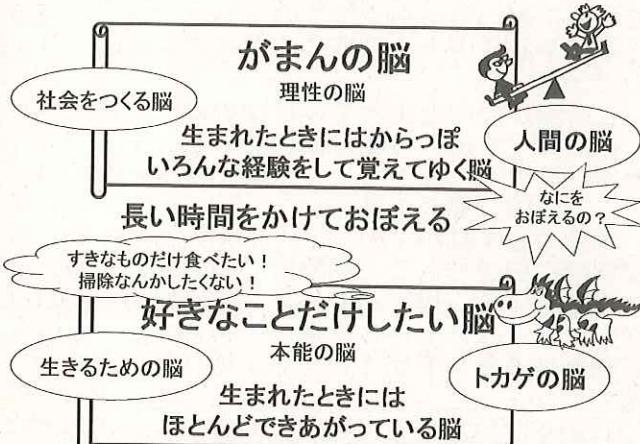


図2 人間の2つの脳：本能の脳は好きなことだけをしたい脳、理性の脳はがまんの脳

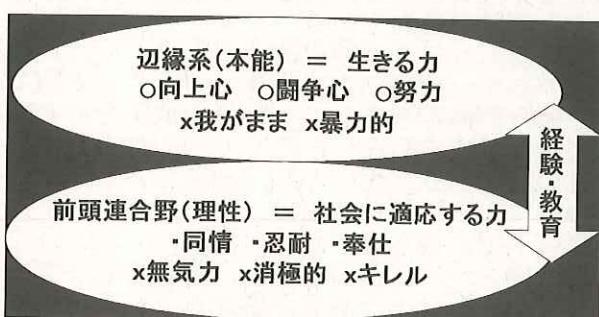


図3 本能の脳と理性の脳のどちらがなくても生きていけない。生きる力とは2つの脳のバランスのとり方を覚えることである。

こうしてみると、社会的常識がない親は、「自分の子供しか目に入らない」という、きわめて本

能的、情緒的な行動をしている。ということは、本能を抑制すべき理性の脳が十分に発達していないのである。もちろん、これは「頭がいい、悪い」という記憶や経験の問題ではない。記憶や経験を基にして、社会的に正しい判断をする力が付いていないのである。だから、せっかくの記憶や経験を、自分の本能的な要求の達成のためだけに使い、それが社会的常識に反することには思い至らないのである。

これは、「他人の心や、他人の痛みが分からぬ」と言い換えることもできるだろう。そんな人は、昔もいなかったわけではない。しかし、そんな人は大家族の中で年寄りや周囲の人から厳しくしなめられ、態度を改めなければ相手にされなくなった。社会全体が社会常識を守る努力をしていったともいえる。ところが、最近の個人主義の風潮の中で、個人主義と利己主義が取り違えられているような気がする。個人の人格の独自性と自律を重んじる「個人主義」やプライバシーの尊重は大事だが、これは他人の痛みを感じない「利己主義」とは全く違う。その違いを認識するのが理性である。それでは理性の脳を育てるにはどうしたらいいのだろうか。

### 3 理性の脳を育てる

人間は15万年前にアフリカで誕生し、狩猟採集生活を続ける中で、子供たちの理性の脳を立派に育ててきた。教育と、豊かな経験のなかで社会的な判断力を身につけさせたのである。

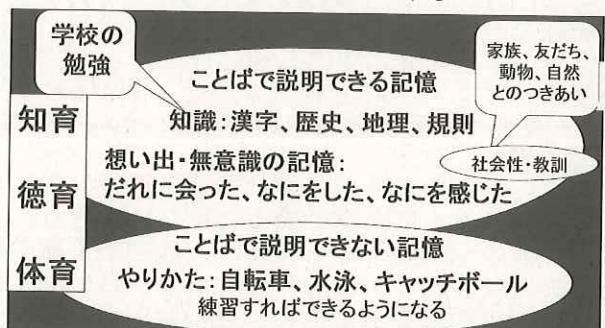
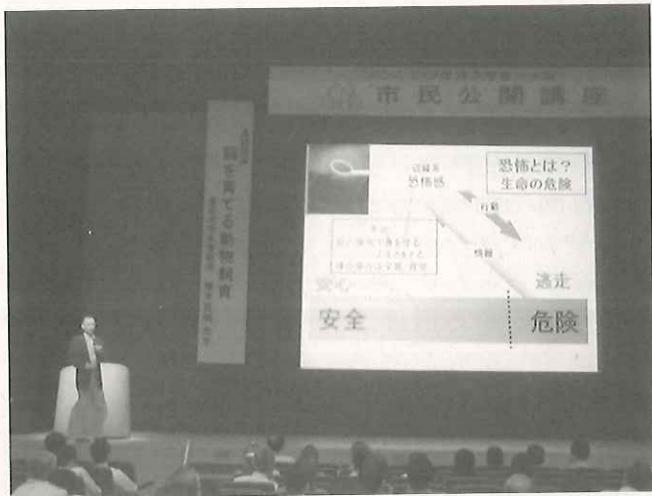


図4 覚えることは3つある。第1は体の動かし方、すなわち体育であり、第2は漢字や歴史のような知識、すなわち知育であり、第3は豊かな経験や思い出、すなわち德育である。

教育とは教科書を勉強することだけではない。第1に、大人の行動を真似ることである。子供は物まねの天才であり、そうやって理性の脳が育っていく。いい手本は理性を育てるが、悪い手本は理性を損なうことは言うまでもない。第2に、悪いことをしたら怒られ、いいことをしたらほめられる。そうして善悪の判断を身につけていく。そんな簡単な方法である。

豊かな経験とは、喜びと悲しみ、出会いと別れ、誕生と死など、感情を動かされる多くの出来事との出会いである。とくに、自分より小さな子供な



ど、小さくて弱い相手に愛情を感じ、自分が守り、助けることの喜びを味わうことはとても大事なことである。

小さくて可愛い動物とふれあい、その温かさ、やわらかさ、心臓の鼓動を感じ、心を通わせる経

験は子供たちにとって忘れられない想い出になり、その中から豊かな感性と知識を得るだけでなく、適切な判断力を身につけること、すなわち理性の脳の発達を助けることが期待されるのである。

2007年1月14日に開催された第6回全国学校飼育動物研究大会においてお茶の水女子大学の中島由佳らは「学年での動物飼育体験が子どもの動物への共感性および向社会行動の発達に与える影響の検討」と題する研究結果を発表した。それは学年飼育を行った小学4年生と行わなかった小学4年生の動物への共感性および向社会的行動の変化を比較したものである。その結果、動物飼育を1年間行うことにより動物への共感性および向社会的行動が有意に向上升ることが示された。このような動物飼育の教育効果の科学的な検討がさらに進むことが望まれる。

(東京大学名誉教授)

